## 508 良性骨腫瘍における骨シンチグラフィの臨床的評価

佐藤兆志，仲山 親，木本龍也，中田 肇，高橋里美
（産業医大 放） 鈴木勝己（同 整形）

良性骨腫瘍における骨シンチグラフィ（骨シンチと略）の意義について検討した報告は少ない。今回われわれは，これらの疾患に行った骨シンチの所見をretrospectiveに検討したので報告する。

対象は確診の得られたexostosis 7例，fibrous dysplasia 9例，nonossifying fibroma 13例，bone cyst 9例，enchndroma 6例，およびその他17例などよりなる61例である。骨シンチは$^{99m}$TC-MDP 5～15mCi静注4時間後に全身と局所を撮像した。得られたシンチグラム上，病変のRI集積の程度を（－），（＋），（＋＋）の3段階に分けて評価した。

（＋）とされたものは22例，（＋＋）とされたものは33例で，55例（90%）は異常集積を示した。fibrous dysplasiaは（＋＋）が7例と多く，exostosisは（＋）が6例と多かったが，他の疾患では（＋）と（＋＋）の間に差はみられなかった。しかし，病巣のRI分布では周辺のみ高いものと均一に高い集積を示すものに分けられた。（－）とされたのは，nonossifying fibromaの4例とbone cystの2例のみである。

骨シンチはRI集積の程度とその分布を参考にすれば，良性骨腫瘍の診断にも有用な情報を与える。

## 509 原発性骨腫瘍のシンチグラフィー

斎藤了一，田島廣之，奥山 厚，細井盛一，
本多一義，隈崎達夫，山岸嘉彦，恵畑欣一
（日本医大 放科）

今回我々は，過去10年間に当科にてTc-99m-MDP及びGa-67-citrateの両者によるシンチグラフィーが施行された原発性骨腫瘍（骨の腫瘍類似疾患を含む）74例につき検討を加えた。全例に生検あるいは手術による組織診断が確定している。

悪性群の18例のうち，多発性骨髄腫の1例と悪性線維性組織球腫の1例以外はすべてTc，Gaともに集積が見られた。

良性群の56例にては，線維性骨異形成9例・良性軟骨芽細胞腫3例・軟骨粘液線維腫1例では全例が，孤立性骨嚢腫では12例中3例・骨軟骨腫では11例中4例・骨巨細胞腫では8例中4例・軟骨腫では5例中2例がTc，Gaともに集積を認めた。Tc，Gaいずれも集積が見られなかった例は孤立性骨嚢腫12例中3例・骨軟骨腫11例中1例・非骨化性線維腫4例中2例のみであった。又，これらを除く24例ではTcのみの集積を認めている。

尚，29例では血管造影も併わせて施行したが，Gaの集積の見られなかった悪性線維性組織球腫の1例では悪性所見は得られなかった。

## 510 悪性骨腫瘍の術前化学療法効果判定における骨シンチグラフィーの役割

松本誠一，川口智義，網野勝久，和田成仁，
磯辺 靖，真鍋 淳（癌研病院整形外科）
金田浩一，峯 博子（癌研病院放射線科）

はじめに：現在，悪性骨腫瘍に対し，術前化学療法が施行されることが多いが，その治療効果を早期に判定することは治療方針を決定する上で重要である。我々は，治療効果判定の一助として，骨xp，Xerography，CTscan，骨シンチ等種々の画像診断を行なってきたが，今回，骨シンチの意義について他の画像診断と比較検討する。

症例：四肢長幹骨に発生した骨肉腫14例，ユーイング肉腫5例である。

方法：化学療法開始前および終了時に，99mTcリン酸化合物による骨シンチを行なった。19例中14例ではlife sizeで撮像することによって異常集積の範囲をより正確に描出した。また健側および患側に関心領域を設定し，健側と患側の比をもって化療前後の集積の変化を測定した。これら骨シンチの変化と切除材料の組織学的治療効果とを比較した。 結果：組織学的に術前化学療法が有効だった症例の大部分では，骨シンチ上異常集積の低下，異常集積範囲の縮少がみられ，骨シンチにても治療効果ありと判定し得た。しかし治療による骨シンチ上の変化は，Xerography上の変化に比較すると緩徐であるため，早期効果判定という観点からみると骨シンチは不充分であった。

## 511 多発性骨髄腫の骨病変の検出における骨および骨髄シンチグラフィ併用の有用性

大塚信昭，福永仁夫，曽根照喜，友光達志，
柳元真一，村中 明，森田陸司（川崎医大一核）
井上信正，杉原 尚，八幡義人（同一血内）

多発性骨髄腫14例（未治療例6例，化学療法施行例8例）について，骨・骨髄シンチグラフィを施行し，多発性骨髄腫の骨病変の検出における有用性を検討した。多発性骨髄腫の未治療例6例の骨シンチグラフィの内訳は正常像3例および欠損像3例であった。これらの症例では骨髄シンチグラフィの方がより多くの病変部位を指摘でき，また浸潤範囲を明瞭に描出できた。

一方，化学療法施行例の8例は骨シンチグラム上，全例，集積増加を示した。一方，骨髄シンチグラフィでは骨シンチ上，集積増加を示した部位でも正常像を呈する例が多く認められた。多発性骨髄腫の骨レ線像は特徴的な所見を示すが，治療による骨病変の変化はとらえ難い。したがって，多発性骨髄腫の骨病変の評価には骨シンチグラフィに骨髄シンチグラフィを併用することの有用性が認められた。

Presented by Medical*Online